「肝苦（チムグリ）さ」から「恨（ハン）」思想へ

―「共生共死」の教育から、「共生」の教育の方へ―

From *Chimugurisa* to the Popular Thought of *Han*:
Toward Education that Teaches “Living Together” rather than
“Living Together and Dying Together”

髙橋　舞*
TAKAHASHI, Mai

【要旨】「命（ヌチ）どぅ宝」精神は、県民の４人に１人の命が奪われたと言われる「沖縄戦」の経験と教訓を通じ、沖縄の人々の間から生み出されていった民衆民主思想である。本稿ではこの思想の形成に関わり、現在も思想を牽引し続けている２名の民衆思想家金城実と知花昌一に焦点をあてる。具体的には、両氏の関わりがもたらした戦争記憶（空間）継承上の意義と、両氏が思想形成されていく過程を辿ることを通じ、現在の「命（ヌチ）どぅ宝」精神の思想的核心が、沖縄の文化に深く根付いた共感感情である「肝苦（チムグリ）さ」から始発しながら、両氏をとりまくコミュニティーにおいては、朝鮮民族の思想が編み込まれた民族的感情「恨（ハン）」の思想に共鳴し、さらにこれと浄土思想を融合させることで、「恨（ハン）を解いて浄土を生きる」という、人と人が豊かに繋がり合うことを可能にする共生思想へと洗練化されている地点にあることを確認する。

キーワード：　金城実、知花昌一、恨之碑、命どぅ宝、肝苦さ、民衆思想、恨（ハン）の思想

問題の所在　―なぜ金城実と知花昌一か―

「命（ヌチ）どぅ宝」は、太平洋戦争において国内（現存の日本国内）で唯一地上戦を経験し、県民の実に４人に１人もの犠牲者を出した「沖縄戦」の経験と教訓とを通じ、民衆の中から生み出されていった、沖縄独自の民主思想である。沖縄では今日に至るまで、「命（ヌチ）どぅ宝」のスローガンの下、戦争記憶の継承活動や、米軍基地撤廃のための市民運動等、二度と戦争を起こさないための平和運動が展開されてきている。その中でも沖縄県読谷村は、沖縄戦記憶継承に欠かせないと言われるチビチリガマとシムクガマの戦跡を有し、平和運動の盛んな地域として知られている。と言うのも、アメリカ軍の沖縄本島初上陸の地であった読谷村は、即時にほぼ全域をアメリカ軍上陸拠点として没収され、村民は今日に至るまで、人間としての「生」の営み、平和を取り戻すための闘いをするしかない状況を突き付けられてきたのである。

＊ 日本女子大学学術研究員

この読谷村に、現在、「恨（ハン）之碑」という、戦争記憶を継承する碑が設置されている。アメリカ軍初上陸の地である読谷村にはいくつもの戦跡が残されているわけであるが、この碑が興味深いのは、これが戦跡に設置されたものではなく、かつ、碑に刻まれている戦争記憶も、読谷村民の記憶でも、沖縄県民の戦争被害記憶でもないという点である。

調べてみるとこの碑は、朝鮮半島から強制連行され過酷な生を強いられた日本軍の「軍夫」や「慰安婦」にさせられた人々を記憶するために、現「NPO 法人沖縄恨（ハン）之碑の会」(法人化は 2008 年～）という名称で活動する事業体によって建立されたもので、さらに興味深いことに、実は読谷村に碑が建立されるより前に、まず軍夫たちの出生地である韓国慶尚北道に建てられ、その後に読谷村にも同碑が建てられた経緯を持つことがわかった。毎年 6 月 23 日の沖縄「慰霊の日」の一週間ほど前に恨之碑の前で追悼式が行われ、現在に至るまで継続的に交流実践が計られている極めて珍しい「韓日交流碑」という形態を持っていた。それではなぜ「恨之碑」は読谷村に設置されたのだろうか、簡単にその経緯を辿ってみたい。

「恨（ハン）乃碑」の歴史は 1997 年 7 月末、沖縄で開催された「働く青年の全国交歓会（当時、現在は平和と民主主義を目指す全国交歓会（ZENKO））」において、韓国太平洋戦争犠牲者遺族会より来日した元朝鮮人軍夫の姜仁昌（カン・インチャン）氏が沖縄で強いられていた過酷な体験を証言したことに始まる。姜氏は強制連行によって沖縄慶良間諸島・阿嘉島まで連れてこられ、食糧もろくに与えられずに過酷な労働を強いられた上、稲穂や芋を盗んだ等という理由で 12 名もの仲間が日本軍によって処刑される場に立ち会わせられた人物であった。その姜氏の「今も異教の地でさまよう犠牲者たちの遺骨を故郷に持ち帰り手厚く死者をともらいたい。そのために日本の心ある人々の支援をお願いしたい」(ポンソナ通信第 28 号、10）との呼びかけに、沖縄民衆が応える形になったと言う。1997 年 12 月には、宮古島に連行され、やはり多くの仲間の命が奪われる凄惨な体験を記憶する徐正福（ソ・ジョンボク）氏も加わり遺骨調査が取り組まれたが、処刑現場の特定はされるも遺骨はすでに戦後まもなく地元の人々に掘り起こされ、沖縄の慰霊塔に収められたと推定され、この段階で、「韓国と沖縄の慰霊とメモリアルの意味をもったモミュメントを作っていこう」(同 10）という話に発展し、1999 年、出会いからわずか 2 年という短期間で、沖縄の反戦彫刻家が韓国に出向き姜氏らと呼吸を合わせながら製作した「恨（ハン）之碑」が、虐殺された同胞たちの故郷・韓国慶尚北道に設置された。そしてこの「恨（ハン)」は、沖縄の民衆も決して忘れてはならない分かち持つ苦しみであると考えられ、姜氏の友人達が虐殺された阿嘉島には条件にあう土地が見つけられなかったものの、読谷村にならば土地提供（借用）を受けられる場があるという話になり、慶尚北道設置から 8 年を経て兄弟碑が設置されるに至ったと言う。

上記のような経緯を有する「恨之碑」との出会いは、加害戦争記憶継承の在り方や、被害的立場にある者と加害的立場に位置する者同士の共生の可能性を追究してきた筆者にとり、長年探し求めようやく辿り着けた源泉のように感じられるものだった。二度と戦争を行さない平和な社会を維持していくために戦争の記憶を継承しようとするならば、自身が所属意識を持つ共同体内の「われわれ」の記憶という垣根を超えて、敵や、支配・搾取した人々等、戦争に関った「われわれ」以外の他文化・他民族の人々の戦争記憶も全て、皆で分かち持ち、共生していくということが理論上欠かせない。逆に言えば、もしも支配され殺された被害者と支配し殺した加害者が、本当に共に記憶を分かち合い生きていく場が実在しているのだとしたら、そのコミュニティーから

は、分かち合いの場を可能にした共生の原理と思想が抽出されるはずである。このような想いから「恨（ハン）之碑の会」のコミュニティに参与（観察）する術を探し始めたところで、いとも簡単にそれは実現の運びになった。筆者は既に、沖縄で著名な民衆思想家であり反戦彫刻家として知られる金城実氏に聞き取りを始めた段階にあり（2014 年 11 月に初訪問）、2015 年 8 月、2 回目の聞き取りに伺った際にその想いを伝えた所、その碑なら自分が製作した碑であり、同作品が裏のアトリエに設置されていると告げられたのである。このようにフタを開けてみれば、聞き取りしていた本人が「恨之碑」の製作者であり、また「恨（ハン）之碑の会」の理事でもあり、次回追悼式に来たらいいと、著者は苦労なく念願のコミュニティに招き入れられたのである。同様に、翌年 2016 年 6 月 12 日（土）に「恨（ハン）之碑追悼式」に初めて参加することになり、「恨之碑」にも近いからと、やはり以前より聞き取りを要望していた知花昌一氏経営の民宿「何我舎（ヌーガヤ）」に宿泊を依頼する過程で、その知花氏もまた「恨（ハン）之碑の会」の理事であり、追悼式読経を行う「僧侶」でもあったと知るに至った（現在は安里英子氏と共に共同代表）。図らずも、自分の研究対象者が両氏共に、自分の切望する研究フィールド先がそのようなものとして存在していることに、決定的に欠かせない中心人物の内の 2 名であったのだった。

結論を先取りしまずなぜ「恨（ハン）之碑」が読谷村に設置されたのかと言えば、知花氏が長年、出生地である読谷村の村会議員を勤める等、地域に根差し生きてきた人物であったため適切な土地をみつけられるだけのネットワークを有し、結果としてこの地に「恨（ハン）之碑」が設置されることになったと言うことであった（知花氏本人談より）。また「恨之碑」の制作者が金城氏であった理由は、1983 年に知花氏からチビチリガマに設置するモニュメント寄贈を依頼されるという形で 2 人が出会い（金城 1987、108-112）、その後両者の間に思想的な結びつきが生じ、以来同じコミュニティーで沖縄の平和運動を推進してきた協働関係を持っていたためであった（金城・知花・髙橋 2019）。すなわち、姜氏の要請を受け止めたコミュニティーに既に両氏がおり、現在の「沖縄恨（ハン）之碑の会」が結成されていき、遺骨発掘が不可能なことがわかった時点で当然の流れとして彫刻のできる金城氏が追悼碑を作ることになったわけである（『ポンソナ通信』第 28 号、2021）。さらに言えば、碑やコミュニティーの名称に朝鮮の民族的感情を象徴する「恨（ハン）」の言葉が用いられたのは、朝鮮人軍夫の追悼碑として、他者文化への敬意を示したという理由からだけではない。金城氏は、大阪に在住していた 1970 年代後半より沖縄人の「誇り」を生み出す思想として「恨（ハン）」思想を取り込んだ作品づくり、思想実践をはじめ（福島 2015、121。金城 1987、125-127）、1983 年の知花氏との出会いの後には沖縄のコミュニティーの中で共有され、沖縄の民衆思想として鍛えられるものとなっていたのである。つまり、筆者が抽出したいと考えた「共生の思想」とは、まさに韓日交流を可能にした「沖縄のコミュニティーに生じていた恨（ハン）」の思想だったと言うことになる。したがって本稿では、この思想形成に決定的にかかわった金城氏と知花氏に焦点をあて、なぜ彼らが「共生の思想」を生み出すことができたのか、両氏の思想形成過程を辿ってみたいと考える。これらを通して、彼らから見いだされる共生を可能にする思想的核心、原理を抽出すると共に、それが、いかに、洗練化されて行ったのか確認していくこととしたい。

1. 知花昌一と読谷村

沖縄現代史を語る上で欠かせない人物の 1 人とされている知花昌一は「日の丸を焼いた人物」として良く知られるところであるが、その知花が今日まで大事にしている宝物も、実は 10 代の頃に自ら購入したという「日の丸」である。メディアでも度々紹介されてきたこの知花の「日の丸」は、「日の丸」少年であったと言う知花の青春時代の象徴として「我が家の宝物」とされているものである（20191119 聞き取り）。知花はなぜ「日の丸」少年で、青春時代の宝物が「日の丸」だったのだろうか。逆に、「日の丸」少年だったのならばなぜ、知花は 1987 年 10 月 26 日、宝物であったはずの「日の丸」を焼く事件を起こしたのだろうか（知花 1996 増補版（初版は 1988））。

周知の通り沖縄の人々は 1954 年サンフランシスコ講和条約により日本の主権回復と引き換えに小笠原諸島と共に日本から切り離され、27 年間に及ぶアメリカ統治下におかれた。沖縄で 50 歳を越える人々は皆、日本人とされながら、パスポートを取得しなければ本土に行くこともできない「アメリカ世（ゆ）」と、1972 年日本復帰（小笠原諸島は 68 年復帰）以降の「ヤマト世（ゆ）」という 2 つの時代を生きる経験を有してきた。そして知花は 1948 年生まれであることから「アメリカ世」時代に購入した「日の丸」を現在でも宝物としつつ、「ヤマト世」に復帰した以降の「日の丸」を焼いてしまったことになる。知花にとって「アメリカ世における日の丸」と「ヤマト世における日の丸」は、いかに差異化されるものであったのか。

シムクガマとチビチリガマの戦跡を有する読谷村は、現在では沖縄戦を学ぶのに欠かすことのできない、最も重要な平和学習の場の一つに数えられている（屋嘉比 2009、65-75）。米軍が上陸した 1945 年 4 月 1 日、知花の親族が居住する波平地区の住民はシムクガマとチビチリガマに分かれて身を潜めたが、シムクガマに避難した 1000 人は 1 日の内に投降し一人の犠牲もなく命をつなぎ、他方のチビチリガマでは 2 日から 3 日にかけて強制集団死（金城・知花・髙橋 2019）が起こり、ガマにいた 139 名の内、実に 85 名もの命が失われてしまった。まだ独身であった知花の父親は出征中、母親も東京の工場に就職し読谷村に不在だったために命をつなぐことができたが、知花の親戚の中にも何名ものチビチリガマでの犠牲者が出ている（同、131）。また波平地区に居住していた母方の祖父母家族はシムクガマに逃れ助かることができたが、祖父は、知的障害をもつ娘を逃がすために、シムクガマに行かず一人で竹やりをもって米軍に立ち向かい射殺されてしまったと言う（知花 1996、5）。知花は「反戦地主」としても知られるところであるが、これは通称「象のオリ」と言われた米軍軍事通信傍受施設が立った場所に、この祖父が 70 坪の土地を所有していたためである。知花の祖父はこのように、米軍上陸と同時に射殺され知花の母方の一族は一瞬のうちに生活の場を取り上げられてしまったのである（同、5）。このような悲劇は知花の一族に特別に起こったわけではなく、読谷村は、銃剣とブルドーザーによって集落という集落がなぎ倒され、村面積の実に 95% 以上もの土地がアメリカ軍用地となり、戦後 1 年 7 か月後にようやく捕虜収容所から帰った村民に許された居住スペースは、たったの 5% と言う有様だった（真宗ブックレット 1995、46-47）。復帰前の 1970 年の段階でも 78% もの土地がアメリカの軍用地のままで（同、8）、知花も村民も、生活苦と戦争の脅威、米軍兵によるレイプの絶えない、まさに過酷と屈辱の理不尽さを極めた中で生きてきたのである。このような生活の中で唯一希望の光となったものが学校で手に取ることのできる日本の「教科書」であったと、知花は朝日

新聞社のインタビューに次のように答えている。

> 学校では日本の教科書が読めました。祖国の日本には戦争を放棄する日本国憲法第 9 条あるのだと僕は教わっています。米軍に支配された沖縄の現実の中で教科書だけが民主的だった（朝日新聞デジタル、2021 年 8 月 18 日 17 時）。

知花は、「自分は元々日本人なのだ、今は戦争に負けたせいでアメリカに取り込まれているだけ」で、沖縄が日本に復帰さえできれば、日本国憲法 9 条に守られ米軍基地はなくなり平和の中で生きていけるのだと信じ、自ら「日の丸」を購入したのだと言う（同新聞）。そして想いを共有した沖縄の人々誰もが「日の丸」を掲げた「祖国復帰運動」に自身も青春を捧げていった（同新聞）。知花にとって「日の丸」とは、平和憲法、民主主義の象徴であり、人々が自由に生きる権利を奪い、平和と逆行する戦争に向かう不当で非民主的な「米国支配への抗議の印」（同新聞）であったのである。

ところが日本復帰により 27 年ぶりに日本国憲法、日本民主主義国家の元に戻ることが叶った沖縄に待っていた現実は、知花や祖国復帰運動において求められていた「核抜き本土並み」（知花、1996、6）を完膚なきまで裏切るものであった。1960 年に条約改定され新たに締結された安保第 6 条により日米地位協定が作成されていたことから、復帰前と変わらず米兵の特権は維持された上に、むしろ今まで以上に基地が拡大され、より一層、戦争危機と米兵犯罪の横行に怯え生きることが強いられることになってしまった。このように信じてきたものに裏切られたことで、知花の内に、自分が信じた「日の丸」とはそもそも何であったのか、徹底的に問い直して行かなければならないとする意識が芽生えて行った。その意識は平和憲法を得たはずの「日の丸」が日本復帰後も沖縄を守らなかった、日本の戦後民主主義への問い直しと言うことに留まらず、そもそも唯一の地上戦地として他のどの都道府県民よりも日本人として献身的に国家（日の丸）に尽したはずの沖縄戦とは何であったのか、と、当然の流れとして 1945 年以前の「日の丸」にも、向けられて行った。知花の内に生まれた「日の丸」に対するこうした問いこそが、今日に至る知花の思想と思想実践とを鍛え上げていったと言えるだろう。と言うのも先に、読谷村にはシムクガマとチビチリガマという沖縄戦における平和学習の重要な拠点地があると述べたが、知花の少年時代や復帰運動に捧げた青春時代に、そのような平和学習の場は存在していなかった。存在していたのは知花が中学生の時に悪企みをするアジト（2018 年 6 月 17 日、聞き取り）にしていたというシムクガマだけで、「ごみ捨て場になっていて、誰も知らないところになっていた」（金城・知花・髙橋 2019、129）チビチリガマの記憶を 1983 年、ノンフィクション作家の下島哲郎と共に蘇らせ、「シムクガマとチビチリガマをセットで平和について深く考える場」としてひらき、今日まで平和ガイドとして話し続けている本人が、知花昌一なのである。今日、シムクガマとチビチリガマの記憶が沖縄戦を学ぶ上で欠かせないものと位置づけられているのは、同じ波平地区の人間でありながらどちらのガマに避難したかで生死が隔たれてしまったことの原因から沖縄戦の犠牲の本質と教訓が抽出できるためであるが、具体的にそれはいかなることとして知花らに見出されていったのだろうか、次に見ていくこととしたい。

チビチリガマでは集団強制死が発生してしまったのに、シムクガマではなぜ 1000 人全員が助かることができたのか。この事態の明暗を隔てたものは、たった 2 名の「非国民」の存在であっ

た。当時、住民たちの間で「非国民」と呼ばれ訝しがられていたハワイ帰りの元農業移民 2 名（屋嘉比 2009、71–72）が避難した先は、シムクガマであった。2 人は移民生活の経験から、アメリカ軍は、村民が「鬼畜米英」として学校や日本軍から教えられてきたような残虐非道な赤鬼などではなく、「手向かいしなければ殺さない」ことを知っていたため、二人でガマを出、米軍と交渉し 1000 人の住民の命が救われたのであった。他方、チビチリガマには中国出兵経験を持つ在郷軍人と、中国戦線に同行した従軍看護婦の 2 名がおり、ガマ内で、日本軍が中国で行ってきた蛮行と残虐行為を住民に説いたことが、集団死の引き金となったと言う（同、67）。2018 年の教育思想史学会コロキウムの場で金城、知花両氏に登壇してもらいチビチリガマの記憶継承をテーマに話し合いの場が持たれたが、その際、遺族の証言を直接聴き追体験してきた知花が、集団死に入っていく様子を語った。はじめは「上地ハルさんという 18 歳の若い娘さんが、敵につかまって殺されるぐらいなら、お母さん私を殺して！！と言い出した。お母さんもかわいい年ごろの娘が、赤鬼みたいなアメリカにメタメタにされて殺されるより一緒に死のうと、お家から持ってきた包丁で首を切っている。血がピシュッって見えて、それを見ていた人たちが自決に」（金城・知花・髙橋 2019、131）入っていったと言う。ここから明確に見てとれるものは、85 名もの命を集団死にむかわせた原因には、決定的な形でそれまでに受けてきた「皇民化教育」の影響があったと言うことだろう。ガマ内で話された内容は実際には、皇民化教育を受け戦地へ向った「日本軍の蛮行」の内容であった。しかしそれらを話した在郷軍人と看護師自身も、同様の蛮行がアメリカ軍によってもたらされると信じたがために、ガマにいる人々を自決へと誘導してしまったと言える（屋嘉比 2009、67）。そして、これを聞いた住人の側では自決するか否かで意見が二分し激しい言い争いが起きたと言うが（下嶋 1884）、その中でもやはり、「赤鬼みたいなアメリカ」ととらえ、目前にいるアメリカ軍も蛮行を行うと信じた者たちから自決が始められていってしまったのである。住民側のこのような思考性も、在郷軍人らの発言によって瞬時に生み出されるようなものではなく、当然、それ以前に既に、アメリカ軍は残虐非道な「赤鬼」で女性であればレイプまでされ無残に殺す、絶対に捕虜になってはならない、生きて虜囚の辱めを受けず等と、学校や日本軍に教えられてきた皇民化教育が内在化されてきた結果であると言えよう。つまり巻き込まれる場合を別として、住民の生死を隔てたものは、皇民化教育のよき学び手であったか否かの隔たりであるということなのである。このことは、次のような生存者による証言からも容易に見て取れるだろう。

—「出たい人は出なさい」といわれて、安心して、どうなってもいいから……、煙で苦しんで死ぬよりは、アメリカーに撃たれて、楽に死にたいとチビチリガマの外に出たさ。前の部屋にいたからよ、奥の部屋の人たちがふとん重ねて、ランプの石油かけて、半分燃えるのを確かめてから出たよ。火をつけて、まっ暗だった部屋が明るくなって、人の顔も見える状態になったよ。人が一人やっと通れるような向こう側で、火をつけたからね、中に入っている人たちはもう、出たくたって、出られないよ。ふとんや、まきや、いっぱい積み重ねられていたから……。火がつくと炎で、奥の部屋にいるおじいやおばあの顔が、まっ赤になって、うつっていた……。もうこれでおしまいと、オニのようにまっ赤な顔してバンザイしている。天皇陛下バンザイと……。まっ赤な人たちが、自分のふとんや、着物を燃える火の中に投げこんでいるんだよ。わやわやする炎の向こうに、バンザイ、バンザイと

手を上げている人たちが……。もうこれだけが忘れられない。（知花信治の話（屋号・上倉元、当時 11 歳）、下嶋 1984、119–120）

チビチリガマでは 139 名の避難者の内、半分にも満たない 50 名ほどしか生還することが叶わなかったわけであるが、しかし見方を変えれば、このガマには日本軍が在中していなかったために、50 名は生還できたのだと言えるかもしれない。と言うのも、沖縄県立平和祈念資料館に展示された「ガマでの惨劇」と題された日本軍と住民が共存したガマの再現模型では、監視をする軍人の銃口の先は敵ではなく、沖縄住民に向けられている。沖縄戦において日本軍は、先に避難していた沖縄住民をガマから追い出したり、共存した場合にも住民虐殺を行ったりした事実がある（屋嘉比 2009、58）。筆者は沖縄のフィールドに入り 9 年になるが、そこで触れてきた言葉、沖縄の人々の証言も「アメリカ軍より日本の軍人の方が恐ろしかった」「日本軍は国民を守らなかった」と言う内容で溢れ、かつ一貫していた。この記憶が、「沖縄住民の大多数の人びとがリアリティを感じている」（同、63）日本軍に対する戦争記憶なのである。したがってもしもチビチリガマにも日本軍が同行していたならば、上記証言者等、ガマから出て投降を試みた 50 人の方が日本軍人によって、日本国民、皇国民としての「虜囚の恥を晒す者」等として射殺されていた可能性がある。つまり、バンザイをして自決していった住民こそ真の日本「国民」であり、投降者 50 名はこの段に至ってはもはや、シムクガマの 2 名の農業移民と同様の、国民にあるまじき「非国民」と呼ばれ得る存在者だったはずである。ところで、なぜシムクガマの移民帰りの 2 名が住民に「非国民」と呼ばれていたかと言えば、日本とアメリカが戦争を始めた当初、周囲の人々に、アメリカと日本の国力の差を引き合いに出し、日本が勝てるわけないと語ったり、国民と財産を守らない戦争に意義はあるのかと言ったりと、「日本軍に楯突くような言動」をしてきたからであると言う（同、72）。ここからも見て取れるように、「非国民」としての異質性とは、皇国民教育の呪縛から解放され、集団としてではなく「個人」として自分で物事、外界を見、判断する思考性を有しているという意味だったと言えよう。

チビチリガマの発掘調査から 4 年後の 1987 年 10 月 26 日、知花は、沖縄で開催された国民体育大会において、ソフトボール会場として指定された読谷村平和の森球場に掲げられた「日の丸」を引き下ろし焼き捨てると言う事件を起こす（知花 1996 増補版）。読谷村民の平和の意思としてこれまで一度も掲揚しなかった「日の丸」を（下嶋 2016、313）、日本ソフトボール協会の広瀬会長が掲揚を拒否すれば国体会場を変更すると脅迫的に押し付けてきたことに対し、知花は、「ここで一歩引けば戦争になる」（知花 1996 増補版、149）と強い信念を持ち「日の丸」を焼き捨てたのだと言う。この信念は「チビチリガマの「集団自決」の体験を、その調査をとおして実感をもって受けとめて」（同、148）きたことからもたらされたものであるとし、氏はチビチリガマに真摯に向き合う中で学び直した沖縄の歴史認識を、事件の翌年に出版した自著『焼きすてられた日の丸』（同）の中で展開する。長くなるが、ここに「日の丸」に象徴される皇民化教育の問題の本質が見い出されていると思われるため取り上げてみたい。

琉球処分から始まる明治以来の沖縄の歴史すべてが本土による差別の歴史だった。明治以来長いあいだ沖縄は「特別県」として経済的にまず徹底してしぼり取られた。それは最後にはいわゆるソテツ地獄と呼ばれる極限にまでいきつく。これにたいして沖縄の指導的な立場

にいた人々は、沖縄も本土ももともとは同じ起源をもつという日琉同祖論を唱え、沖縄が差別されるのは言語風俗が本土と違うからだ、だからそれを本土と同じようにすることによっていわれなき差別を撤廃しようとしたのだった。とりわけ沖縄の方言、ウチナーグチは徹底して押さえこまれた。方言撲滅運動である。

そうして沖縄は、これでもおまえら日本人かと言われ、天皇を受け入れ、日の丸を受け入れ日本の戦争体制に全面的に協力していったのだ。沖縄の人々は、そうすることによって差別がなくなると思っていたけれども、結局沖縄戦という究極の状態のなかで 15 万人が殺されるというものすごい犠牲を強いられていくことになった。皇民化とは沖縄の人々にとっては、差別から逃れるために本土をまねるということであった。沖縄の人々は、「動物的忠誠心」とわれるほど本土の人々以上に「日本人らしい日本人」になろうと必死に努めたのだった。その結果が沖縄戦における日本軍による住民虐殺であり「集団自決」だった。チビチリガマでは「帝国日本の男児たるものがそのうろたえようは何か！竹槍をもって戦おう！」と檄が飛び、「日本国民ならば天皇陛下万歳をして死ぬべきではないか」と言って布団に火がつけられていったのだ。

さらにこの沖縄にたいする差別は、戦後の天皇による沖縄のアメリカへの売り渡しとなっていった。天皇は国体護持、つまり天皇制を守るために最後の「戦果」をねらって沖縄作戦を裁可したうえ、さらに戦後、極東軍事裁判が皇族の追及にかかりはじめた時期に自ら進んで沖縄を米軍の軍事支配のもとに置くことをアメリカに申し出た。沖縄はふたたび捨て石とされた。沖縄に米軍基地が集中して押しつけられている現在の状況はここから生まれてきた。

「本土なみ・一本化」を旗印に 72 年本土復帰が行なわれ、いまふたたび「日の丸・君が代」「天皇」が沖縄に強引に持ち込まれようとしている。そこで言われることはまたしても「日本人として日の丸を掲げるのは当然」といったことなのだ（同、151–152）。

ここに示された知花による、沖縄に対して日本が行ってきたことの歴史認識とその問題とは、沖縄へのまなざしと行動が戦前と戦後、そして日本復帰以降も現在に至るまで、一貫し変わっていない問題として抽出できるが、それは具体的に言えば、戦前の「日本人らしい日本人をつくる皇民化教育」的構造が今日まで温存されたままであるということになる。この沖縄の歴史から学ばれる皇民化教育の問題の核心は、差別と言う手法を使い、沖縄の人々に日本国民に参入させる同化を強いてきた、差別と同化の構造の、さらにその先にある目的に置かれなければならなかったという点になるだろう。知花は日本の歴史が沖縄に対し有してきた一貫性を「ファシズム」と呼び、これを容易に生み出すことのできる原理として多数決原理の危険性を示唆する。

多数決が民主主義だと思い込んでいる人たちがいます。多数決で全部決めてしまって少数者の意見をまったく取り入れないのでは、それはファシズムです。これまでの歴史を見ても弱者、少数者を犠牲にし異質なものをつぶしていって、全体として突っ走って、マインドコントロールされて戦争に突入していきました（知花 2017、16）。

知花らが沖縄の歴史から学んできた教訓とは、ナチズムにおいてもヒトラーが音楽等の芸術を利用し熱狂の国民づくりを行い、正当な民主主義の手続きを踏んで独裁体制に持ち込んだように

（金城 1987、21）、民主主義というシステムの中にあっても、ポピュリズムのようにふるまい、感情を巧妙に扇動するメディアコントロールにより、同じ感情を共有した多数決の「多数＝全体」を、作為をもって作り上げ正当な総意の結果とし少数を圧殺していく方法でファシズムは可能になるということだった。そして、知花らが学んできたこととして警鐘をならすファシズムの本当の問題は、少数者が差別・排除され犠牲になることではなかった。これに関しては、金城が日本に対する少数として時に利用され、時に切り捨てられてきた沖縄だからこそ、このファシズムの形はよく見え、それゆえファシズム化を進行させるメディアコントロールに抵抗する闘いを展開してきたのだと、知花の行ってきた仕事を高く評価する形で次のように語っている。

> 曽野綾子が沖縄戦の隠ぺいに入ったのが 1970 年、沖縄復帰前。（復帰で）あの集団自決とか沖縄戦について爆発的に盛り上がろうと読んでいた権力は何をしたかというと『諸君』という雑誌を使って、曽野綾子の軍団を沖縄に落下傘部隊として送り込んだ。それが『ある神話の背景』（曽野 1977）です。小説『切り取られた時間』（曽野 1971）というのまで書いた。沖縄の死んでいった人たちに命令はなかったんだ。美しく死んだんだと言うのが曽野文学です。その後の家永裁判事件。そして最近の大江岩波裁判は、県民 10 万人近く集まった。そうやって我々は、戦争の記憶を守るというのは、徹底的に潰しにかかってくる権力との闘いと言う思いでやってきたんです。……（ここに）なぜゴミ捨て場になっていて、誰も知らないところになっていたチビチリガマに、知花氏が穴をあけようとしたのかということ（理由）があるわけです（金城・知花・髙橋 2019、129）。

沖縄の歴史認識として「集団自決」と呼ばれていた呼称が現在では「強制集団死」と言い換えられるようになっている（屋嘉比 2009、28-35）ことにも明らかなように、ここで金城が曽野文学を「沖縄戦の隠蔽」だとした点は、犠牲者たちの死には「強制はなかった」とする点である。曽野は先に見たような「天皇陛下バンザイ」と言って自ら焼け死んでいったおじいおばあ達の死を、自主的に選択された美しい死、美しい犠牲とし、死を美化する。なぜその必要があるのか。それは皇国臣民こそが犠牲になり、その場にいる人の命全員を救うことができたのは「非国民」の方であったというチビチリガマとシムクガマの経験が明らかにした通りであろう。すなわち、少数者を排除し犠牲にするから戦争が可能になるのではく、莫大な犠牲者を生じさせることで成り立つものである戦争と言うものは、多数者（マジョリティ）の方を犠牲にする論理が作動しなければ成立しえないのである。国民全体が、自らの命を犠牲にできるようになる教育が皇民化教育であり、ファシズム国家とは、そのように個人の命が国家に対し圧倒的に軽い価値となる国家を指すと言える。だからこそ知花は、そのような「国民」へと参入させる旗印である「日の丸」を強制された時、まさに「ここで一歩引けば戦争になる」と考えたのであろう。知花が徹底的な歴史の見直しから見出した価値とは、命より大切な国家などない、誰一人犠牲になってはならない、「命（ヌチ）」こそが「宝」なのだという精神であり、これを守るために、知花は命を犠牲にすることを美化したり正当化したりする「ヤマト世の日の丸」の方を、焼き捨てなければならなかったと言えるのではなかろうか。

2.「命（ヌチ）どぅ宝」の思想形式過程

沖縄近現代思想史の研究者であった屋嘉比収は、「命どぅ宝」が市民の間に広く獲得されていく過程を「言説化」と呼び、これを厳密に分析・解明した人物である。その氏によれば、「「命どぅ宝」という言葉は、庶民の生活の中で息づきながら個々の場面で使用されていた事例もあろうが、戦中から戦後初期に書かれた文章ではほとんど確認」(屋嘉比 2009、199）されていない。1960 年代後半に、言葉の一部になる「命」が登場し（同、199)、「命どぅ宝」言説化の決定的契機となったのは、「1982 年 6 月に文部省の教科書検定において、高校教科書から沖縄戦での日本軍による「住民虐殺」の記述が全面削除された事実が、地元紙で報じられた」地点であったと言う（屋嘉比 2009、202)。沖縄タイムス、琉球新報各紙が、ただちに 3 か月にもわたる長期連載の開始、関連諸団体も素早く反応し、金城が言うところの「潰しにかかってくる権力との闘い」が行われたのであった（同 203–205)。その中で特に注目すべき点は、団体や研究者だけでなく新聞を読む「読者」の側から連日証言の投稿が寄せられたということであった（同、203)。「教科書検定で日本軍による住民虐殺が削除されたことに対して、「今、語らなければ再び悲惨なことになる」と、悲痛な叫びと固い意志によって、37 年間の沈黙を破り、新たに語り始め」(同、204）られたと言う。そして「体験者の証言を採録しながら「沖縄戦とは何だったのか」を深く問いかける連載の取材過程で、「命どぅ宝」という言葉が見出され」、沖縄タイムス紙上で文字化されたことが、「その言葉が初めて新聞紙上で登場した瞬間」(同 205）となった。屋嘉比は、この「命どぅ宝」の言葉は沖縄戦の研究者のあいだで使用されていたものであったが、「新聞紙上で取り上げられ多くの県民の耳目にふれて認識されたことで、その後に沖縄戦を語るさいの一つの言説を形成した」と分析している（同、205)。戦後 38 年の沈黙を破り 1983 年にチビチリガマの発掘調査と証言が啓かれたことと、「命どぅ宝」が言説化された地点は、こうして見事に重なり合うものであったと言えよう。

ただし、「命どぅ宝」が新聞紙上面に登場する以前から沖縄戦の研究者たちで使用されていたのは、沖縄戦を解釈するなかで、研究者自ら沖縄語を組み合わせて新しく造語していったということではない。屋嘉比が「庶民の生活の中で息づきながら個々の場面で使用されていた事例もあろうが」と述べている通り、実際に、庶民の言葉として存在していたものであったことは以下の金城の語りからも見て取れる。

> 沖縄は、極めてすばらしい文化があります。「命どぉ宝」ということばはどこから生まれてきたかと言うと、……あの忌まわしい第二次世界大戦、集団自決までもやらされて国の犠牲になったあの沖縄人民が、どこからともなく巷で、子どもや孫を見ると「ヌチドゥタカラヨー、ヌチルタカラドー」。私も言われた。私の父親の名前は「マクトゥー（誠)」と言われてましたから、「イッターウヤ、マクトゥーヤタンヤー、ミノルー、ダーウヤンシジネーンシガヤー、ヌチドゥタカラドー（あなたの父は誠だったよ。残念に戦争で亡くなってよ。命どぉ宝だよう)」ということばでした。沖縄全域に「ヌチドゥタカラドー」ということばが広がった時代です（金城 1987、21–22)。

さらに、金城自身は、父親が一歳に満たない時に出征しブーゲンビリア島で戦死したため（金

城 2001)、漁師であった母方祖父・宮城真苅（みやぐすくまかり）の下で育ち、祖父を見て「ヌチドゥ宝」を学んだと述べている。「海で生きるものは自然に対して謙虚な気持ちになることで生きることができるのだ」(金城 2003、2）と、漁にでる時には排泄物まで船の中にとどめおくように戒められたことまであると言う。そして祖父マカリーは漁の仲間に対して一切の搾取をするということがなく、「漁夫が仮に 10 人いるなら、10 人のなかには 4、50 年前から漁をやっているベテラン、昨日、今日海に出るような人もいるのですが、同じ分け前です。実際に私が経験したことでは、漁を始めて間がない聴覚障害者もともに海で作業しましたが、収穫の魚、貝類などは全て同じに分けました。その行動を支えたものが生命こそ宝ものだとする「命どぅ宝」だったと思います」と述べている（同、1–2)。

金城の祖父マカリーは漁師たちを束ねる網元であったが、地位や能力に優劣をつけることなく漁獲された生活の糧を平等に分配していた。金城はここに「命どぅ宝」の精神を見たわけであるが、そうだとすると「命どぅ宝」とは、命に優劣がないことが前提とされた、特定の者が困窮したり苦痛したりすることを許さない分かち合いの精神、平等分配の精神と言い換えられる。ただし、「命どぅ宝」という言葉が民衆の言葉として言説化される以前にその精神を体現していた言葉は、沖縄の伝統的心性である「肝苦（チムグリ）さ」であるとし、金城は、「肝苦さ」が「命どぅ宝」の精神の基盤に位置づく感情であると示唆する。

3. 沖縄の伝統的心性「肝苦さ（ちむぐりさ）」

「肝苦さ」は沖縄独自の文化を表現する沖縄語で、その意味を一語で日本語に翻訳することが不可能な言語である。日本語の場合、苦しみにある人を前にした時に持ちうる感情表現は、「かわいそう」となる。しかし「かわいそう」という表現では、「肝苦さ」の意味するところを反映できない。「かわいそう」には、「かわいそうだけど何もしてあげられない」や、「かわいそうだからそっとしておこう」等と、むしろ他者との関係を遮断する使用法もある。すなわち、苦しみの中にある者を一人にしないという意味は「かわいそう」の用語自体に含まれない。それゆえ「一人にしない」ことを「かわいそう」と結びつけて表現する場合には「かわいそうだから一緒にいてあげる」、「かわいそうで見ていられなかったから協力した」、「かわいそうだから寄付します」等、「かわいそう」の後に他者と関係することを説明する文章を付随させる必要を伴う。その際、付随されるのは、何かを「してあげる」という尊敬表現となる。近年では「上から目線」のような印象を与えがちな表現であるが、本来は尊敬の意がふくまれる用語ではある。しかしいずれにせよ問題になるのは、ここに「肝苦さ」との決定的な異なりが生じている点である。それは「かわいそう」には他者の傷・苦しみに触れ「ほっておく」のか、何かを「一緒にしてあげる」のかの選択権があり、さらにその選択権を有しているのが「こちらの側」であるという主体性を有している点である。他方「肝苦さ」は、こうした選択権を持たない。他者に対自した際に放たれる「肝苦さ」は、「上下関係が込められたかわいそうではなく、対等の立場で、苦しみを共有し合う」(金城 2003、3)、言い換えれば、苦痛にある他者に向かい「チムグリサヤー」と発語した瞬間に、既に他者の苦しみの分有が表明されてしまう感情表現、それが「肝苦さ」と言えるのである。

日本の社会において、一つの単語で他者と対等関係で他者の苦痛を分有する意味を含む用語を

考えるとすると「共苦」となるが、「あなたの苦しみに共苦します」と言う会話表現を聞かないように、「共苦」は日常語ではない。今日の日本社会で「共苦」という語が使用される場面は、主に「Compassion」の訳語としてである（髙橋 2019、101. 宮本要太郎 2016. 髙橋・須永・中西・三宅・徐・目取真 2002）。つまり日本社会では、他者と共生するために必要な「感情」でありながら、「肝苦さ」に該当する用語を持ち合わせてこず、むしろ西欧社会で「Compassion」が流通する中で、海外から持ち込まれる思想として共感共苦や共苦が流通しだしたのだと考えられる（宮本要太郎 2016. 髙橋・須永・中西・三宅・徐・目取真 2002）。

では「肝苦さ」は「Compassion」と等価の意味を持つのか、と言えばそれもそうではない。と言うのもコンパッションは「共に」を意味する「Com」とパトス（岡部・小野 2021）から派生した受難や受苦を含みこむ「Passion」が結び付けられはじめて、「苦しみを共に分かち合う」という他者に対自する一つのワードを構成するが、「肝苦さ」には英語で言うところの「Com」、日本語の「共に」の言葉が含まれていない。「肝（チム）」は日本語の「心」を意味する。「苦さ（グリサ）」は苦しいという意。つまり「肝苦さ」は共苦の意味を持たず、単に「心が苦しい」と言っているに過ぎない。本来それは「自分の心の痛み」のことを指し、文字通りの意味で取るなら「肝苦さ」はコンパッションではなく、「パッション・パトス」と同義的な用語である。しかし「かわいそう」のように、他者の苦痛に対する特定の感情表現も持たないため、自分の苦しみに対しても他者の苦しみに対しても同じ、自分の心が苦しむ「肝苦さ」を使用するのである。この「コンパッション」と「パッション・パトス」の両方を内包する言葉である点に、「命どぅ宝」と同様に、「肝苦さ」の沖縄の文化の中で培われた独自の心性が示されていると言える。それは苦痛に対し、他者の苦しみと自分の苦しみを隔てる必要性を感じない心性を有してきたと言うことである。その「肝苦さ」が、「命どぅ宝」の肝（きも）となる感情であるとされる時、もはや「命どぅ宝」は権力に搾取・回収されえない翻訳不可能な言語となろう。「差別されるのはかわいそうだけれど、日本と異なる文化を持っている外国人だからしょうがない」等と、他者の苦しみをコンパッションとするか、パッション・パトスとするかの選択の余地がある場合は、他者の命と自分の命を差別化できたり、他者の命の価値を選別したりする「境界線を引くこと」が可能だが、他者の苦しみと自己の苦しみが隔たれることなく、全てが同じ自己の肝（チム）の苦しさとして孕まれていく「チムグリサ」から「命どぅ宝」を叫ぶ時、国家の境界線の内外で命の価値が変わっていい「命」と言うことも許されないことになる。また、受苦・パトスは、他の感情と同様に記憶されるものであるが、他者の苦しみをも自分の苦しみとして境界線なく引き受けていくのが人間の在り方だとすると、肝（チム＝心）とは、もはやどこまでも深く、命の苦しみと悲しみを受容・孕んでいく器として捉えられるものである。こうした器を有する者同士として関わりあう社会には、苦しみや悲しみが特定の者に集中する不公平性、不条理性を許さない、共に苦しみを分かつ共苦の「平等さ」が存在するように思われる。だとすれば、人を決して孤独に捨て置かない、人々が深く繋がりあうことのできる共生社会が、沖縄戦に巻き込まれる以前の沖縄、琉球の時代の風景に存在していたと考えられるのであり、「肝苦さ」こそ再評価されるべき沖縄の共生思想であるように思われる。ところが金城は沖縄語の「肝苦さ」には「どうしても「恨」を乗り越えられないもどかしさがある」（金城 2001、91）とし、「肝苦さ」に近い感情であると考えられる、朝鮮民族の伝統的感情である「恨（ハン）」思想を、「命（ヌチ）どぅ宝」の中心に据える提案をする。

4. 沖縄「恨（ハン）」思想

「恨（ハン）」は日本語の「恨み（うらみ）」とは異なり、喜怒哀楽といった単なる感情を示す言葉ではない。恨は自己の内部に鬱積された悲哀、苦しみ、諦念を抱えた感情が沈殿し堆積した状態（＝恨（ハン））が、自身の中で醸成され新しい望むべき生へ昇華される「＝恨解き（ハンプリ）」に向かおうとする、長い時間性が付与された「感情の営み」のことである（海野・権丙 1987、花崎 1981、金城 2001、川瀬 2018）。

こうして見るとすぐわかるのは、「恨（ハン）」思想にあり、「肝苦さ」には存在していない観点は、心（肝）を痛める感情が、変容・昇華を前提としているか否かという点になるだろう。前者は変容・昇華を伴うことが前提とされているために、用語にあらかじめ、その目的である恨（ハン）解きに向かう醸成、鍛錬といった時間的営為が付随されている。他方「チムグリサ」という用語が包摂する内容は、「恨（ハン）」でいうところの、鬱積され堆積された状態、肝苦さが堆積されていくところまでが捉えられるに留まる。したがって「肝苦さ」の用語には、苦痛をもたらした者、状況に対する被害者意識のみが強化されてしまう場合の余地が残される。その場合、被害者意識から日本語で言うところの「恨み」が生じ、他者を傷つける加害者性へと転嫁する可能性が生じることも否定できない[1)]。しかし「恨（ハン）」思想では、大きな苦しみを与えられた者が被害者として打ちひしがれて生きることや、自分に与えられた苦痛が不当なものだからと他者への暴力として外へ向かうような、「肝苦さ」では排除されきれないこうした余地が、明確に否定される。

「恨（ハン）解き」という時間的思想的営為がセットされている「恨（ハン）の思想」においては、積もり積もった苦しみの念である「恨（ハン）」は、あくまで人間の生が「人間として望むべき生」へと醸成され昇華されるためにある、元手と考えられるものなのである。金城が「恨（ハン）思想」に共鳴する観点はまさにこの点にあり、この元手を、金城は「痛めつけられた人間しか拝むことのできない「人間の誇り」」（金城 2001、福島 2015、川瀬編 2016）をもたらすものとして受け止めることを提案している。なぜなら、この「恨（ハン）解き（プリ）」を通じ新たに得られる生の在り方、ステージこそが、仏教において親鸞が「浄土」と呼んだ境地を指し示すものであると、金城は考えたからである。こうして金城は「恨（ハン）思想」と親鸞の「浄土思想」を融合させた「恨を解いて浄土を生きる」という独自の思想に辿りつく。金城はこの思想が自らの内に獲得されていった経緯について、以下のように語っている。

「「現世こそ浄土」は、靖国裁判を闘うことで芽生えてきたのです。1985 年の裁判（注 30 参照）で、中曽根康弘首相が「靖国は日本の伝統文化」と豪語した。そのころに家永三郎さんの沖縄戦の教科書記述をめぐる裁判が闘われていました。「集団自決」が「強制集団死」と定義し直された。沖縄戦の認識が深まることで次第に親鸞の文言が迫ってきたのです。「主上臣下、法に背き義に違い、怒りを成し怨を結ぶ」という言葉です。長年考えてきた天皇制について親鸞に励まされました。念仏による浄土、それは現世でこそ実現するものです。闘いを厭わないことを教えている。天皇制と闘うことと琉球独立は結び付くのです。さらに「恨を解き浄土を生きる」という言葉にたどり着く。「恨」は個人ではなく民族に昇華した言葉です。その「恨」を解いて、つまり泣いたり、わめいたりするのではなく、悲劇を乗り越え二度と戦争のない世界を創っていくこ

と。ここで「現世こそ浄土」とは、「恨を解き浄土を生きる」ことで実現させていくのです。人間の誇りを拝もうではありませんか」(川瀬編 2018、278–279、引用中の注は本文のまま)。

上記に見られる金城の内で獲得されていった「恨を解き浄土を生きる」思想は、「浄土」とは死後の世界ではなく「生」の世界にあるという考えに基づき、自己犠牲的精神を許さないものと言える。したがって、金城が見出した思想は「ヌチ（命）どぅ宝」の思想と言える。そして、「肝苦さ」から「恨（ハン)」の方へ、さらに鍛え上げられていった金城の「命（ヌチ）どぅ宝」思想がもたらした、より重大な意義としては、「命」が「宝」である根拠が見いだされた点が挙げられる。

なぜ「命」は犠牲になることが許されない「宝」であると言えるのか。それはまず金城によって、どれほど不遇で不公正な抑圧された環境を生きてこざるを得なかった人間であっても、諦め捨てたほうがよい人生は一つもないことが示された点が挙げられよう。金城は、むしろそのように苦痛を強いられた、痛めつけられた人間ほど、生きて自らの内に堆積された「恨」と対峙し「恨」を「解いていく」ことを通じ、国家や文化の枠組みを相対化し眺める視野を得、真に人間として生きることができるようになる、命とはまさに「宝」であると自ら実感できる「浄土」に住まうことが可能になることを示唆したのである。その際、「命どぅ宝」という実感は、「恨」を「解いていく」という時間的な、まさに「生」の営みの中で初めて得られるものになる。したがって、人間が真に生きる、浄土を生きることを可能にしてくれるものが「命（ヌチ)」でしかないため、「命（ヌチ)」は決して犠牲になってはならない「宝」であると言うことができる。

ひとりになる思想　―共生共死と共生のちがい―

「命（ヌチ）どぅ宝」精神の思想的核心として洗練化されていった「恨（ハン）を解き浄土を生きる」思想は、金城によって独自に生み出されて言ったと述べたが、厳密に言えば正確ではない。このような言葉として彫刻作品や書物、演壇、デモ等での表明を行ってきたのは主に金城であるが、彼の思想は他者と分断された孤高の状態から生み出されたものではない。金城の周りには常に、沖縄、部落、在日、ハンセン病（病気・障がいを持つ者）等のレッテルを貼られてきた、抑圧や差別と闘ってきた同胞、仲間がおり、金城の思想は、こうした切磋琢磨し鍛えられていく共生のコミュニティーの中から紡がれてきたと言える。だからこそ、一見すれば沖縄の人々にも、在日、朝鮮民族の人々にも受容されづらいように思える、他者の文化である朝鮮の恨（ハン）と浄土思想との融合思想も、金城の独りよがりにならず、同時的に民衆の思想実践に繋がるのだと言えよう。本稿初めに取り上げた通り、この思想は、まさにその名称が取り入れられた「恨（ハン）之碑」という韓日交流碑を生み出し、「沖縄恨（ハン）之碑の会」という思想実践コミュニティーをもたらしたのである。そして「恨（ハン）之碑」は、日本軍人に処刑されようとしている、朝鮮人軍夫の最期の「生」の時が刻まれた彫刻であるが、その目隠しされた朝鮮人軍夫の立ち居、表情はまさに誇り高く、人間の尊厳を讃えている。被害加害関係のある、韓国と日本という国境を越えた規模で、この「恨之碑」が設置され現在まで人々によって交流が継続され得ている事実が、「恨を解き浄土を生きる」思想が、民衆の中から協働的に生まれた思想であることを証明していると言えるだろう。

とりわけ知花昌一に至っては、その存在抜きには「恨（ハン）思想」が今あるような形で思想化され、思想実践されることはなかったと想像されるほど、金城と最も近い位置から共に思想を生み出してきたパートナーであると考えられる。というのも、チビチリガマに設置する追悼碑制作を知花が金城へ要請したことによって始まった両者の関係は、相談し合ったり切磋琢磨し合ったりすること以上に、常に物事を具体的に進めていく協働実践をもたらしてきた。また浄土真宗との出会いはそれぞれ個別のストーリーを持つものの（東本願寺編 1995「真宗ブックレット No.5」、44－72）、2002 年末、金城が原告代表として立った「沖縄靖国訴訟裁判」で事務局として支えられたことが直接的契機となり、いよいよ両者は真宗大谷派の門徒にもなったのだが、その際にも金城が知花を誘い 2 人で一緒に入門したと言う（福島 2015、150）。そして金城は、浄土真宗との出会いをもたらした人物である玉光順正僧侶を引き継ぐ形で 2008 年に「琉球親鸞塾」を開き、知花がその幹事長を務め（同、150）た。さらに知花に至っては、2010 年に読谷村村会議員を辞めた後修行を経、2011 年に僧侶にまでなってしまった（同、153）。2014 年には「何我寺（ぬーがじ）」を開き、現在知花は実際に僧侶として思想を人々に解き、民衆に寄り添う思想実践者として生きているのである（同、150）。このようなわけで、筆者が宿泊した知花の民宿も「何我舎（ぬーがや）」だったのであり、知花が「恨之碑」追悼式に「恨之碑」を前にして読経を行う僧侶である理由も、単に、浄土真宗と出会ったことだけでなく、両者が協働し共に生きてきたという作用の結果として捉えられるものであろう。「命（ヌチ）どぅ宝」精神はこのように、両者セットで「肝苦さ」からさらに、「恨（ハン）」思想と浄土思想が融合される形で、思想的に洗練化されてきたものであると考えられる。では具体的には、「肝苦さ」から「恨（ハン）」への洗練化とは、いかなる変化として説明できるものだろうか。それは、僧侶になってよかったことは何かという問いを受けインタビューに応えた知花による以下の回答に、端的に回答されているように思われる。

> ひとりになることができました。みんなにならず、ひとりになる。ひとりになるとは、自立した人間になることです。みんながひとりになれば、つながっていく。自立した人間同士は通じ合うから、孤独ではありません（朝日新聞デジタル 20200818）

知花が述べた「ひとりになる」という考え方は、確かに「肝苦さ」には含まれていなかった。「肝苦さ」には、他者と自己を隔てない、苦しみを分かち持つという平等性が見いだされるものの、「沖縄戦」という極限状態を突きつけられた中では、それと明確に区別される「ひとりになる」という思想を伴わなかったために、日本軍の指示した「軍官民共生共死」の思想と「肝苦さ」の平等性が親和性を持って捉えられてしまうことがあったのかもしれない。

「共生共死」という皇民化教育がもたらす犠牲の論理から逃れられるためには、「肝苦さ」における他者への共感・共鳴は、「ひとりになった」自立した人間として共苦できることと規定される必要があったと言えよう。と言うのも、「ひとりになる」ことが必要であるのは、民族的集団的抑圧、差別、搾取としてもたらされる「肝苦さ」であっても、「恨解き」は集団ではなく個人の内に生じるものであり、「浄土」は「ひとりになる」先にしか啓かれないからである。このように、知花の言う「ひとりになる」「自立した人間になる」とは「恨解き」を経ることを指し示し、「恨解き」の先の自分たちは浄土に住まう、民族や国家を超え出た相対的視野を有した人間とな

るために、人間同士繋がることができる、共生ができるのだと、知花は言っているのだと考えられる。

こうして、「命（ヌチ）どぅ宝」は今日、金城と知花、両者の関わってきた協働的コミュニティーにおいて、「恨（ハン）」思想と浄土思想の融合を経た「ひとりになる」思想として洗練化されていると結論できるだろう。そしてこの思想は、犠牲の論理を前提とする「共生共死」と「共生」とを明確に切り分ける論理を有し、前者を退け得ている点を以って、共生思想と言うことができるだろう。

※　本稿は 2020 年 9 月に行われた教育哲学会第 64 回大会研究討議「感情と民主主義の教育哲学」における発表原稿を元に新たに作成した論文である。また当日の「報告」内容は、要約され『教育哲学研究』125 号に掲載されていることを付記しておく。

※　本報告は金城実氏、知花昌一氏、NPO 法人沖縄恨（ハン）之碑の会をはじめとする、沖縄の民主思想を支えてこられました皆様の、多大な調査協力により可能になりました。心より御礼申し上げます。

※　本報告は、JSPS 科研費 20K02502 の助成による研究成果の一部である。

〔注〕

1）　金城は、沖縄人の「肝苦さ」は被害者意識に留まるものではないか、と批判する際、そこには沖縄ナショナリズムという他者に対する加害の暴力性の危険が生じる危険性を強調する。被害加害関係については詳細の分析が必要であり、稿を分け、ここでは金城が恨之碑製作に向かう思考過程を述べた部分を紹介しておく。「私が強調したいのは次のことです。被差別部落民、在日朝鮮人、アイヌ民族という差別されたもの同士が連帯することよりも、経済的に富むこと、高学歴を身につければ差別が克服されるという考えから、はたして解放されているのかどうか、なんです。

1970年にさかのぼりますが、大阪沖縄県人会連合会の役員が解放教育読本『にんげん』で「沖縄の差別」を載せることに反対したことがありました。理由は「沖縄県も亦未開放部落の一種なり」と見られては困るというのです。社会党の兵庫県議会議員上江洲さんが論文で「おかしいではないか。自分らの差別を許さないが、他人の差別はいいのか」という論法で迫ったわけです。差別を受けたものが一緒になって解放されるのが本当であって、被差別部落の問題と教科書のなかでいっしょくたになっては誤解されるという主張は明らかに間違っています。そうした過ちを分析しますと、沖縄ナショナリズムがそこに垣間見えますよ。半世紀近い前のことですが、はたして克服されているのかどうか。……日本の植民地支配についてのウチナーンチュの立ち位置についても議論しなければならない。沖縄は1879年の「琉球処分」以降の皇国皇民化、ヤマトゥに渡った沖縄人に対する差別、そして沖縄戦、敗戦後の日本国憲法の埒外におかれた米軍施政下、さらに「本土復帰」後も在日米軍基地を押し付けられてきた。強まったのは被害者意識ではないか。では、加害の側面を直視することが地道に重ねられてきたのか。強制連行された朝鮮人軍夫の碑である「恨之碑」（2006年5月13日除幕式）を読谷村の一角で製作しながら問い続けていたことです。」（川瀬編2018、28-29頁）

引用・参考文献

海野福寿・権丙卓1987『恨ハン　朝鮮人軍夫の沖縄戦』河出書房新社

大西忠保2013『写真記録　金城実作100メートル彫刻「戦争と人間」』
岡部美香・小野文生2021『教育学のパトス論的転回』東京大学出版社
鹿野政直2011『沖縄の戦後思想を考える』岩波書店
川瀬俊治編2018『琉球独立は可能か』解放出版社
金城実1983『土の笑い　――オキナワへ、オキナワから――』筑摩書房
金城実1986『神々の笑い―肝苦りさやー沖縄』怪書房
金城実1987『沖縄を彫る』現代書館
金城実1996「人間の尊厳が何たるかを　チビチリガマの像のこと、わが祖霊の島のことなど」知花昌一・池宮城紀夫・徐勝・安里英子・金城実・◎写真牧田清『我肝沖縄　ワチム（わが心の）オキナワ』解放出版社、151–161頁
金城実2001『民衆を彫る　沖縄・100メートルレリーフに挑む』解放出版社
金城実2003『知っていますか？沖縄　一問一答　第2版』解放出版社
金城実2007「「戦争と人間」と今の沖縄」『季刊前夜　第1期12号　2007年夏』影書房、114頁
金城実・知花昌一・髙橋舞2019「「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性―「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から―」『近代教育フォーラム』第28号、教育思想史学会、127–135頁
『〈コンパッション〉は可能か？』対話集会実行委員会編2002『〈コンパッション（共感共苦）〉は可能か？　歴史認識と教科書問題を考える』影書房
下島哲朗1984『南風（バイヌカジ）の吹く日　沖縄読谷村集団自決』童心社
下嶋哲朗1991『生き残る　沖縄・チビチリガマの戦争』晶文社
下島哲朗2016「知花昌一　―日の丸を焼いた日」杉田敦編『ひとびとの精神史第7巻　終焉する昭和1980年代』岩波書店、307–333頁
髙橋舞2009『人間成長を阻害しないことに焦点化する教育学　いま必要な共生教育とは』ココ出版
髙橋舞2018「「戦争の記憶」継承の原理的考察　―教育課程に位置づく、新しい「戦争の記憶」継承の実践理論構築を目指して―」『立教大学教育学科教育年報』第61号、65–77頁
髙橋舞2022「民主主義のファシズムに抵抗する沖縄の心「命（ヌチ）どぅ宝」」『教育哲学研究』第125号、14–20頁
知花昌一1996「沖縄の地より　我が愛する「ヤマト」へ」知花昌一・池宮城紀夫・徐勝・安里英子・金城実・◎写真牧田清『我肝沖縄　ワチム（わが心の）オキナワ』解放出版社、3–20頁
福島栄寿2015「現代沖縄と親鸞思想　―彫刻家・金城実をめぐって―」『大谷大学真言総合研究所研究紀要』第32号、大谷大学真言総合研究所、Pp. 99–161
花崎皋平1981『生きる場の哲学　―共感からの出発―』岩波新書
宮本要太郎2016「無縁社会における「共苦」（「共悲」）のネットワークについて」『関西大学人権問題研究室紀要』71巻、1–22頁
屋嘉比収2009『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす　記憶をいかに継承するか』 世織書房

新聞記事
2021年8月18日17時、「（インタビュー）沖縄で燃やした日の丸　僧侶・知花昌一さん」、朝日新聞デジタル

資料・会報誌・パンフレット
会報誌2010.9～2022.5『ポンソナ通信』第4号～第30号、NPO法人沖縄恨（ハン）之碑の会